

ある書籍の遍歴：金田平一郎博士旧蔵『宮崎先生 法制史論集』をめぐって

和仁, かや
早稲田大学法学学術院：教授

<https://hdl.handle.net/2324/7391062>

出版情報：大警視だより 続刊. 22, pp.50-51, 2026-01-01. 大警視川路利良研鑽会
バージョン：
権利関係：



【特別寄稿】

ある書籍の遍歴

—金田平一郎博士旧蔵『宮崎先生 法制史論集』をめぐって—

早稲田大学法学学術院教授 和仁かや

日々出版される書籍は、時に複数の所有者（機関）の手から手へと渡り歩くが、その軌跡は知の継承を如実に示すものでもある。筆者が専攻する法制史を例に、この分野での先駆的著作のある一冊につき、刊行から約 100 年の遍歴が思いがけず判明したので、この場をお借りして紹介してみたい。

近代以降の日本において法制史学のパイオニアとして位置付けられるのは、(東京) 帝国大学で初代法制史講座を担った宮崎道三郎 (1855-1928) である。津藩士の子として生まれ、創設間もない東京大学、そして森鷗外 (1862-1922)、穂積八束 (1860-1912) らとともに渡ったドイツでも学んだこの碩学は、古今東西に跨る桁外れな学識に基づき比較言語学的手法をも採り入れるという極めて先進的な仕事に邁進した。それゆえの難解さもあってなかなか読まれてこなかったが、昨今の近代日本学問史・学説史ブームとも言うべき状況も後押ししてか着目が増し、研究も進んでいる。一方、同時代の学者たちと比べても寡作で知られ、まとまった著作としては、没後、弟子であり講座後継者の中田薫 (1877-1967) が「先生の意に反し」て既発表の論考 20 数点を編んだ『宮崎先生 法制史論集』(岩波書店、1929 年) 1 冊にとどまる (以下「論集」と略、引用は同書の中田による「序言」)。

もとより学問著作の量と質とは必ずしも比例関係にはあらず。まさにその体現というべき宮崎の学問を畏敬し、意識無意識の大きな影響を受けていた中田と彼の弟子たちは、総力を挙げて公刊に向けた作業に取り組み、昭和初期の不況を受けた出版事情厳しき最中に、限定 600 部として何とか出版に漕ぎ着けた。

この時の中田の門下生の一人が、本稿で紹介する書籍の持主、金田平一郎 (1900-1949) であった。近世法制史学、とりわけ債権法史の礎を築く金田は、当時は東京帝国大学の大学院生として「論集」の刊行作業に携わっていたが、その真っ最中に、設立からまだ日が浅かった九州帝国大学法文学部への着任が決まり、1928 年 12 月に遠く福岡へと旅立つ。新たな地で励みつつも「論集」の完成と到着を待ちわびていた様子は、後年ご遺族より九州大学に寄贈された日記や手紙からも窺える。九州各地の史料に着目して法制史学における地域史料の活用に先鞭を付け、後にその蒐集に精力を傾けて九州帝大の蔵書・史料形成に大きく貢献した金田の、九州地域の素材を本格的に用いた最初の論考は、方法論的にはまさに「論集」にみる宮崎の比較言語研究に強く触発された著作であった (「近世に於ける九州地方の法制関係語について」『九大国文学』3 号 (1932 年))。

第二次世界大戦を挟んだ激動期に近世法制史学を展開させ、戦後も第 13 代九州大学附属図書館長を務めるなど精力的な活動を続けていた金田は、しかしながら 1949 年に 49 歳で没してしまう。幼い子どもたちを抱え、まだ戦後の混乱残る福岡・箱崎で家族を懸命に支えておられた夫人は、その 1 年半後に郷里の東京に戻ることを余儀なくされる。この際、金田が個人的に蒐集した蔵書史料は、弟子の服藤弘司 (1921-2005/後に金沢大学、東北大学教授) らの手を借りて売却され、その大半が九州大学法学部に納められた。これらは受入時より学内各所に分散排架されていたものの、没後 70 年近くを経て再度集約が実現し、2017 年に金田文庫となった。集約時には多くの重要な蔵書が見出され、それならば学問的にも大きな影響を与えた「論集」もあるはずと探してはみたものの、それらしきものは見出せないままだった。

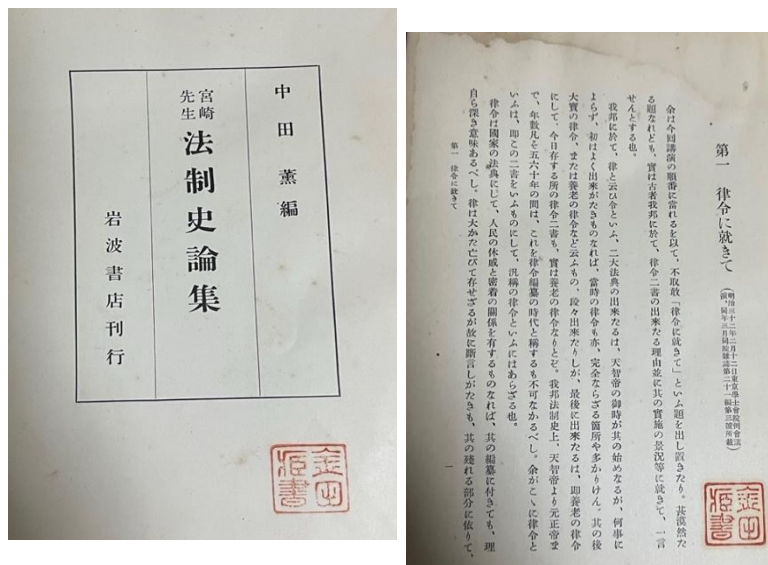
その後、既に所蔵するとして九大が購入を見送った分が、先述の寄贈資料から判明した。福岡学芸大学 (福岡教育大学の前身) に購入を打診したと思いきリストがあり、そこには「論集」も挙げられていたのである。しかし、実際に購入に至った旨の印が付いていたのは、実定法学を中心とした 40 点弱であり、「論集」は含まれていなかった。蔵書はさらに、八幡大学 (九州国際大学の前身)、大分大学、大阪大学にも若干数納めた後、残余は巖南堂 (東京・神田) に売却したらしく、僅かな手掛かりを辿ってみたが、「論集」の行方は杳としてしれなかった (金田文庫の設置も含めた詳細な経緯は、

和仁かや・梶嶋政司・山根泰志・宮嶋舞美「金田平一郎旧蔵書」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2020/2021（2021年）<https://hdl.handle.net/2324/4485342>。

2025年4月、東京大学法学部で長らく教鞭を執られた法社会学の Daniel H. Foote 先生が定年を迎えられたのを機に、先生の師で、前近代日本法研究にも精力的に従事された Dan Fenno Henderson（1921-2001）博士由来の研究資料の一部（金田とは別の案件）を頂戴することとなり、片付最中の Foote 研究室に数度にわたってお邪魔した。その際、書棚に残っている書籍もよろしければどうぞと仰っていただいたご厚意に甘え、遠慮なくあれこれ拝見していたところ、多くの書物の中に「論集」が並んでいるのがふと目に留まった。書籍そのものの学問的な価値は言うに及ばず、限定 600 部と少ないこともあって、古書市場にもなかなか出回らない法制史学分野での稀覯本的な存在でもあり、迷わず手を伸ばす。するとそこには何と、「金田蔵書」の蔵書印がくっきりと捺されているではないか。紛れもない、行方のしれなかつた金田蔵書の「論集」との邂逅であった。

恐らく巖南堂に売却されたうちの一冊と思われるこの「論集」には、「一誠堂」（東京・神田）が販売したことを示すシールが貼付されていた。如何なる経緯で一誠堂に渡ったのか、その間にも別の所有者がいたのかは分からない。が、ともかくも金田が大事にしていたであろう「論集」は、刊行の地である東京に戻り、そこで、ワシントン大学で教鞭を執り稀代の蒐書・蔵書家としても知られた来日中の Henderson 博士の炯眼に触れた。そして、留学を切望しながら太平洋戦争開戦で断念せざるを得

なかった元の持主に代わるかのように海を渡り、アメリカ・シアトルの地に辿り着き、異国の地で役割を果たす。が、Henderson 博士の厩大な蔵書の一部を受け継がれた Foote 先生が今世紀初めに東京大学に赴任されたことで、「論集」は図らずも「帰国」し、再度東京に舞い戻っていた。そこからさらに約四半世紀を経過した後、金田文庫に関わり長らくこの本の行方が気になっていた筆者と、まったく偶然に出会ったのであった。判明したかかる経緯はまさに、「論集」の生命力と、それゆえの伝播・継承とのれっきとした証である。



「論集」扉と巻頭それぞれの右下に「金田蔵書」の印が見える（濱田雅仁氏撮影）

国立国会図書館デジタルコレクションを始め、各大学諸機関が熱

心に進めつつある書籍資料のデジタル化は、通信環境さえあれば基本的に誰でもどこからでもアクセス可能であり、しかも図書館にとって大きな悩みである書籍現物の管理や場所のコストもかからず、書籍に書かれている「データ」（のみ）を活用する上ではまさに「いいことづくめ」であろう。しかしこの「論集」が図らずも辿ったような、凡そ一世紀の間の東京→福岡→東京→シアトル（アメリカ）→東京というダイナミックな軌跡などは、稀有な偶然が重なったとはいえ、書籍現物があって初めて見えてくるものである。書物という知の媒体に何を求めるのか、何を語らせるのか—この一冊が辿った遍歴は、改めてそのシンプルかつ根本的な問いを投げ掛けてはいないだろうか。

（執筆者紹介）和仁かや（わに かや）

近世日本法制史専攻。神戸学院大学、九州大学法学部准教授等を経て、2018年9月より現職。